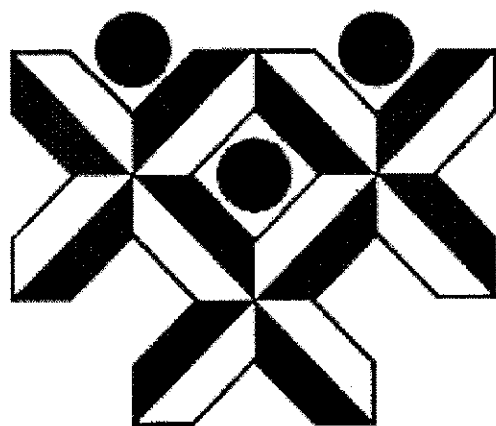


第26回国民文化祭・京都2011

基本構想



京 都 府

目 次

I 基本的な考え方（理念）

- ところを整える～文化の基本形を再発見 Basics 1
- 文化を駆動する力～進取の気風を世界へ Creativity 1
- 21世紀における京都の役割～人類社会の普遍的な価値を探る Responsibility 2
 - ・ 上記の理念を踏まえて～京都開催への取り組み姿勢 2

II 名称、テーマ、会期等

- 1 名 称 3
- 2 テーマ 3
- 3 主催者 3
- 4 会 期 3
- 5 開催地 3
- 6 シンボルマーク 4

III 事業構想

- 1 主催事業の基本方針 5
- 2 主催事業の構成と特色 6
- 3 協賛事業 19

IV 広報計画

- 1 基本方針 20
- 2 年次別広報方針 20
- 3 具体的な実施方法 20

V 運営計画

- 1 運営主体 21
- 2 運営体制図 21
- 3 運営にあたって 22
- 4 開催計画 22

（参考資料）

- ・ 第26回国民文化祭開催準備委員会委員名簿 23
- ・ 第26回国民文化祭基本構想検討の経過 24

Ⅰ 基本的な考え方（理念）

ここを整える

～文化の基本形を再発見 **Basics**

京都で開かれる国民文化祭。これを機に、わたしたちは一度立ちどまり、次のように問いかけてみたい。経済・社会の激しい変化と地球を覆うグローバル化の流れの中で、わたしたちは何かを忘れ、失ってきたのではないかと。そして、あまねく国民にとって文化とは何か、と。

家族で食事をするときに「いただきます」や「ごちそうさま」を言う人は6割あまりとの調査結果がある。また、レストランなどで食事をしたとき、「お金を払っているのになぜ『いただきます』と言わなければならないのか」という意見もある。「いただきます」や「ごちそうさま」ということばには、調達から調理、配膳にいたるまで食の用意にかかわったすべての人びとに感謝するとともに、食材そのものにも感謝するという、日本人の深い精神性が込められている。それは、わたしたちが日々折り目正しくあろうとして育んできた大切な伝統であり、文化である。

こうした文化には、ある行為、ある段取りをきちんとするなかで「ここを整える」という知恵が込められている。急須でお茶を入れ、墨をすって手紙を書く。それは単に、のどを潤し、用件を伝えるということのみではなく、“お茶を入れる”“墨をする”という時間を持つこと自体に深い意味を見いだすものである。

京都は、衣食住の様式から社交の作法、自然環境と調和した暮らし方を編みだし、さらにそこから、粋を極めたさまざまな技芸・学問を生みだしてきた。日本という国が培ってきた文化・芸術の基本形が、ここには集積されている。国民文化祭の開催をきっかけとして、ここ京都から、ありふれた日々のいとなみのなかに文化の基本形を再発見し、日本の文化をふたたび創造性あふれる感受性豊かなものへと向かわせる潮流を生みだしたい。

文化を駆動する力

～進取の気風を世界へ **Creativity**

京都は古来、開かれた地である。北は丹後から南は山城まで、京とつながり、京を呼吸し、京とその外部をつないできた人びとによって、支えられてきた。また、たえず外

の力、外の人^{いにしえ}が流れ込み、その力が京をコアとしたこの地域の文化を駆動してきた。たとえば、古より先進的な文化や技術をもった渡来人の定住が各所に見られ、「平安京」が定められて以降は、各地の職人・達者などが京に集い、そこに京都の伝統産業や技芸、文化の礎が築かれた。その後も、海外の文化を積極的に吸収し、技を磨き、極めるとともに、世界にも類まれな「和」の文化を育んだ。外なる世界に開かれ、また内には先取・革新の気風を宿すというダイナミズムを、京都はその活力の源としてきた。

ここに生まれた文化・芸術の基本形は、日本文化の原点というよりは、人類が培ってきた世界文化の基本形の一つである。その核にあるものをこの国民文化祭であらためて探りあてることによって、激動する世界のなかで今後、日本社会がどのような生き方、

どのような生活の様式を、全国に、そして世界に提案をできるかを考えてみたい。世界から京都へやってきたものを、次は京都から世界へ返したい。

21世紀における京都の役割

～人類社会の普遍的な価値を探る **Responsibility**

資源・地球環境の問題をはじめとして、高齢化社会、教育問題など、21世紀の日本はさまざまな困難な問題を抱え込んでいる。このような時代にあって、経済的な豊かさや効率性に代わる別の生き方、別の価値観、社会運営の新しい方式が求められている。

京都には、生活や行事・催事に四季のリズムがたくみに織り込まれ、歴史と芸術と宗教と自然とが日常の暮らしに浸透するなど、日本人のライフスタイルの原型が深く息づいている。これをもとに、来るべき時代を生き抜いていく知恵を見いだすとともに、地域の絆を再生し、新たなライフスタイルの提案を行うなど、21世紀の人類社会において京都が果たすべき役割を再認識するきっかけとなるような祭典を目指したい。

国民文化祭は、ともすれば県・府民のための文化祭となりがちである。京都で開催する国民文化祭では、以上述べたような視点から、21世紀における文化・芸術の基本形を目に見えるかたちで提示していきたい。「京都らしさ」にこだわることなく、人類社会の普遍的な価値を探り、そのために京都が果たすべき役割を明確に打ちだしていきたい。そのことが、これまでにない、日本文化の粋が集積する「京都ならではの」国民文化祭の実現につながると信じている。

<上記の理念を踏まえて～京都開催への取り組み姿勢>

京都には、各種芸道や舞台芸術、美術工芸など多くの文化関係者がいる。伝統技術を極めた職人たちがいる。大学で教え学ぶ研究者・学生が数多く生活している。世界に向けてメッセージを発する宗教関係者が多数存在する。府民もさまざまな習い事に日々なっている。他方、日本海に面した府北部から奈良県域につながる府南部まで、日本の原風景とでもいえる四季折々の自然や里山があり、それぞれの地域には、豊かな自然環境と厚い歴史に育まれた固有の生活文化が息づいている。

全国からの参加者や、次代を担う府内の子どもたちに、さらにはその親たちに、京都が誇るこれらの多彩な人材や生活環境にじかにふれる機会をさまざまなかたちで提供し、京都の生活文化、芸術文化、宗教文化をたっぷり体感できるチャンスとして、この国民文化祭を、時間をかけて作っていきたい。

文化にも幼児期から成長期、成熟期、そして爛熟期がある。精神や技法を極めたものから、戯れに愉しむものまである。それぞれが文化の、欠くことのできない位相である。国民文化祭（京都）では、地域・分野の別なく、プロとアマチュアの垣根を越えて、それぞれが刺激しあい、活性化しあうようないきいきとした交流を図りたい。

新しい文化の芽生えをこれまでにない視点から創りあげ、発信していくために、文化創造のエネルギーの源であり、文化継承の将来の担い手でもある若者の力、さらには異なる文化のなかで育まれた外国人住民や留学生らの発想を積極的に採り入れ、かれらの斬新な発想や旺盛なチャレンジ精神を発揮するチャンスができるかぎり多く設けたい。

II 名称、テーマ、会期等

1 名称

第26回国民文化祭・京都2011

2 テーマ

「こころを整える～文化^{ほっしん}発心」

日本には、日々折り目正しくあろうとして育んできた大切な伝統があり、深い精神性が込められた文化があります。また、様々な交流の中で創造性あふれる豊かな文化を生み出してきた気概があります。

そのような日本人の「こころ」が、隅々まで息づくここ京都で、日本文化の良さを改めて見つめ直す中から、来るべき時代を生き抜いていく知恵と新たなライフスタイルを創造していこうとの気持ちを込め、「こころを整える～文化発心（ほっしん）」をテーマとしました。

3 主催者

文化庁、京都府、京都府教育委員会、開催市町村、開催市町村教育委員会、文化団体等

4 会期

(1) 主催事業

平成23年（西暦2011年）10月29日（土）～11月6日（日）[9日間]

(2) 協賛事業

平成23年（西暦2011年）4月1日（金）～11月30日（水）[8ヶ月間]

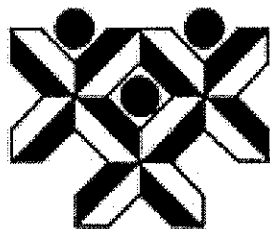
5 開催地

広く府内各地で開催します。

会場については、参加者の発表に際して、多くの人々が鑑賞し、交流できるよう考慮するとともに、地域の文化資源、文化団体、会場施設、宿泊施設、交通アクセス等を総合的に検討し決定します。

6 シンボルマーク

統一のシンボルマークとして、第1回（昭和61年 東京都開催）から次のデザインが採択されています。



文化は人間の知恵であり、秩序ある生活との結合であります。限りなく広がる文化へのあこがれを、歓喜の人形（かた）の構成でイメージしたデザインです。日本古来の古代紫を基調に、明るさを加えて、新しい日本の未来色のイメージにした色彩計画です。

福田繁雄（グラフィック・デザイナー）

Ⅲ 事業構想

1 主催事業の基本方針

主催事業の実施にあたっては、京都の歴史、文化、自然を活かした取組をはじめ、準備段階から、NPO、大学、企業等との連携を重視し、分野、地域、年齢、性別、国籍などを問わず、府民はもとより、全国からの参加者ととともに創り上げていく国民文化祭ならではの事業展開を図っていきます。

(1) 文化の基本形を見つめ直します

自然と共生しながら育まれてきた日本の文化、日々のいとなみの中で洗練され、極められ、伝えられてきた文化の基本形を再発見する祭典を目指します。

(2) 次世代に文化を継承します

全国からの参加者や次代を担う子どもたちが京都の文化にじかに触れる機会を提供するなど、次世代への文化の継承につながる祭典を目指します。

(3) 垣根を越えて交流します

地域や分野、プロとアマチュアなどの垣根を越えて、それぞれが刺激しあい、活性化しあうような祭典を目指します。

(4) 若者が活躍できる場にします

若者や留学生らの斬新な発想を積極的に採り入れ、旺盛なチャレンジ精神を発揮するチャンスを提供するとともに、文化による国際交流を目指します。

(5) 開催に向けたプロセスを大切にします

手づくりの事業手法を重視し、地域と芸術家との出会いを通じて、創造の喜びや感動を共有でき、開催後もその成果が継続できる取組を目指します。

(6) 先取・革新的な文化を創造します

時代の流れを先取りした文化芸術のあり方を模索し、文化創造の積み重ねを新たな伝統に発展させる気風を大切にする活力と冒険心あふれる祭典を目指します。

(7) 国文祭の新しい運営モデルを提案します

各事業の特色を踏まえながら、NPO、大学、企業等との強い連携や協働のあり方を模索し、新しい国文祭運営モデルを目指します。

2 主催事業の構成と特色

「**こころを整える**～文化^{ほっしん}発心」のテーマのもと、全体を通じて、主催事業の基本方針の趣旨を生かした事業構成とするとともに、事業の具体化に当たっては、様々な人々の参画を得ながら、検討を進めていくこととします。

1 総合フェスティバル～開会式・オープニング

第26回国民文化祭の開会を高らかに全国にアピールし、四季折々、美しい表情を見せる京都を舞台に、総合フェスティバルにおいて、「音」「香」「味」「光」「触」「映像」等を駆使して日本文化の粋を体現するとともに、その歴史をひもとく壮大な「日本文化絵巻」を展開し、国内最大の文化の祭典にふさわしいオープニングステージを演出します。

2 日本文化の再発見

シンポジウム

ありふれた日々のいとなみの中に文化の基本形を再発見し、日本の文化を再び創造性あふれる感受性豊かなものへと向かわせる潮流を如何にして生みだすことができるのかを模索します。

暮らしの文化を考える

履き物をそろえる、きものを着る、食事の前に手を合わせるなど、私たちが日常何気なく行っている行為や作法にも「こころを整える」ための深い意味がこめられています。これら、暮らしに密着した祭や年中行事、生活文化など、先人たちの暮らしの中から生み出され、受け継がれてきた文化をどう伝えていくのかを模索していきます。

事業テーマ	内 容
暮らしの文化を参加体験	伝えられてきた日本の行祭事や暮らしの文化の本来の意味を知り、見つめ直す視点から、京都の年中行事や町家生活、きもの文化などに参加体験できる取組を検討します。
「こころを整える」大切さを考える	全国各地の暮らしの文化にも着目しながら、一人ひとりが文化の基本形を見つめ直し、「こころを整える」という知恵から学ぶことの大切さを考える契機となるような取組を検討します。

日本文化の粋に触れる

社寺、町家、茶室などの建築物のほか、各種芸能、伝統工芸品や京料理などの職人技は、日本文化の粋が具体的なひとつの形となって実を結んだものです。現在も人々の暮らしの中に生きる粋な世界を再発見し、じかに触れていただけるような工夫ある取組を検討します。

事業テーマ	内 容
日本文化の粋に触れる	日本文化の粋を考える視点から、伝統産業を支える京都の職人や芸術家との交流・指導を通じて、日本文化の「粋」を直接体感できる取組など、事業の具体化について今後検討します。

府民一人ひとりが文化の主役

京都は、茶の湯・生け花や料亭に見られるように、人間同士の繋がりを大切にし、心を通わせることに重きを置く独自のおもてなし文化を形成し、今日まで伝えてきました。府民一人ひとりが主役となって全国からの参加者をお迎えし、交流を通じて開催気運を盛り上げ、府民誰もが参加意識を持てる工夫ある取組を展開します。

事業テーマ	内 容
府民が文化の主役	府内各地の社寺や文化施設、大学などの数寄屋空間を活用し、いつでも・どこでも茶の湯を楽しめる空間の創出や、まちを花で飾る、わが家のお宝を披露するなどの取組を検討します。

京都の歴史舞台で感動を表現

京都のまちに、歴史と文化、伝統の豊かさと重みが今なお感じられるのは、現在も多く残る寺院や神社の存在があります。社寺は人々が集う場であり、その境内では多くの芸能が演じられ、奉納されてきました。祈りの場が持つ「精神性」は、今も日本文化の底辺に脈々と流れています。そのような京都の社寺などに代表される歴史舞台で、日頃の研鑽成果を発表していただきます。

事業テーマ	内 容
「京の歴史舞台」を参加・体験	京都の社寺などの協力や協賛のもと、名刹や歴史的建築物・景観、四季折々の自然を舞台にして、プロとアマチュアとが競演し、新時代の創造空間を演出します。
京都から伝承した芸能を発祥の地・京都で復活実演	山口の鷺舞や新潟の綾子舞など、発祥の地・京都で廃れ、地域で大切に受け継がれている民俗芸能などにも注目し、京都での復活実演を検討します。

3 京都から全国へ 創造性の発揮

シンポジウム

京都は自然と共生し、伝統を守りながら創造を続けるまちです。人類が必要な進歩を続けていくために科学の進歩はどうあるべきか、人間生活や自然環境との共存をどう図っていくのか、緑溢れる豊かな自然に恵まれ、さまざまな先端科学施設が集積する関西文化学術研究都市から世界へ提案します。

地域と芸術家との出会い・創造

アーティスト・イン・レジデンスの考え方を踏まえながら、芸術家と地域の人たちの出会いを結ぶことにより、アートを身近に感じ、自分たちの文化と他者（芸術家）の文化との交流を通じて、地域における様々な発見を促します。

事業テーマ	内 容
京都版アーティスト・イン・レジデンス	京都ゆかりの芸術家や芸術系大学生の協力も得ながら、その地域固有の地形、建物等を創造空間として捉えた作品の創作などを地域の人々とともに創り上げていきます。
地域の遊休施設をアートのスペースに	古い倉庫や廃屋など地域の資源を再発見し、舞台芸術などの表現の場として活用するなど、地域の魅力を引き出すような事業を展開します。
誰もがアートに親しみ、語り合う	南北朝時代に盛んであった「茶寄合」にちなみ、現代アートに親しみながら茶をいただいたり、様々な芸術を披露するなどの交流を通じて、誰もがアートに親しめる催し等を検討します。

※「アーティスト・イン・レジデンス」とは、アーティスト（芸術家）が一定の地域に滞在し、創作活動を行うこと。

学生との地域連携創造モデルを提案

歴史と伝統がある京都の持つもう一つの顔。それは、この街が学生の街であるということ。「京都総文」や「京都学生祭典」のエネルギーを国民文化祭につなげ、学生や若者が「京都」をキーワードに、街・自然そのものを舞台やキャンパスに見立て、各地域の特性を引き出すような様々な提案を行い、実現していきます。

事業テーマ	内 容
学生パワーを活かす地域連携創造モデルを提案	京都の街や自然をキャンパスに、学生の斬新で自由な発想によるアート活動やダンス、地域住民との協働によるインターネット中継など、京都の学生パワーを発揮する事業を検討します。

京都から現代コンテンツの可能性を探る

近年、「クール・ジャパン」という言葉に代表されるように、ファッションやアニメ、料理など様々な分野で日本が培ってきた文化が海外で注目を集めています。国際都市である京都からポップカルチャーをはじめとする新たな現代コンテンツの可能性を模索します。

事業テーマ	内 容
現代コンテンツを活用した文化創造	日本最古の漫画とされる「鳥獣戯画」など多数の絵巻物を生み、映画発祥の地である京都からマンガに関する企画展のほか映像、デジタルコンテンツに関わる多彩な事業を検討します。
文化をテーマに国際交流を図る	京都の芸術家や留学生などが中心となって、海外の文化団体との国際交流を目的とした祭典の開催を検討します。

科学・技術の未来を読む

京都は、伝統工芸から最先端の技術を生み出し、世界で活躍するハイテク企業やベンチャー企業を数多く輩出してきました。長い歴史と伝統を背景に、時代の求める最先端に挑戦するという進取の気風をもつ京都から、未来にどのような技術が開花し、次代に如何に伝えていくのか、企業文化にも着目しながら模索する取組を検討します。

4 文化が果たす役割の探求

シンポジウム～ところを考える

地球環境問題や教育問題など様々な課題を抱える現代にあって、真に豊かな社会を築いていくために、人類はどのようにして多様な文化に向き合っていけばよいのか、物質的価値や経済効率性に代わるものとして、とりわけ「ところの豊かさ」をもたらすにはどうすればよいのか、など文化が果たしていくべき役割とその方策を、自然と共生しながら豊かな文化を育ててきた京都から、問いかけていきます。

「手仕事・ものづくり」の文化を考える

京都は伝統産業などに代表されるように、「手仕事」の文化が生きています。機械化が進んだ現代において、おろそかにされがちな「手仕事」や「ものづくり」の文化を見つめ直し、ところの豊かさを育て、ものをつくる喜びを体感できる祭典とします。

事業テーマ	内 容
「手仕事」参加体験	伝統産業の中で培われた「ほんまもん」の技を体験し、親子で楽しめる手仕事講座や自然を素材とした素朴なおもちゃづくり、団塊の世代を対象とした作品展の催しなどを検討します。

次代を担う若者・子どもたちが主役

子どもたちにとって、文化豊かな環境で育まれる感性は、生きる力や次代を担う力につながります。開催までの準備段階から、子どもたちが大人やすぐれた専門家、職人の支援を受けながら、日本の文化を次代につなげていく祭典を目指します。

事業テーマ	内 容
生の文化芸術に触れる	各分野フェスティバルにおいて、子どもたちが出演者との交流や、楽器にじかに触れたり、演奏するなどの体験型ワークショップの開催のほか、墨すり体験など様々な取組を検討します。

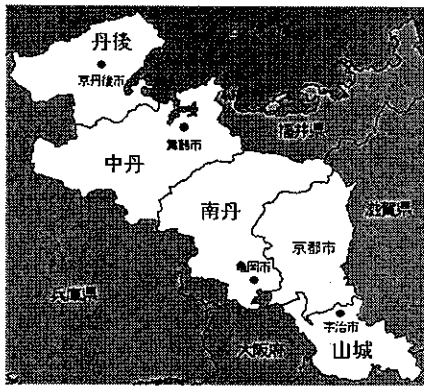
人と自然、文化との調和

京都は地球温暖化を防ぐ国際的取組を示した「京都議定書」の誕生の地であり、京都府地球温暖化対策条例を制定するなど先進的な地球温暖化対策を進めてきました。環境先進地として「自然との共生」「資源の再利用」をテーマにした文化芸術活動のあり方を提案する祭典とします。

事業テーマ	内 容
「水の文化」から自然を見つめる	京料理や茶道など京都の繊細な文化を支えてきた名水や丹波の山間にわき出る清水など、府内各地の名水どころで大茶会の開催など、文化から自然を見つめ直す催しを検討します。
環境をテーマとした文化体験事業等の実施	環境をテーマにした舞台芸術・美術展の開催や、子どもたちが文化体験を通じて環境を考える参加体験型ワークショップの開催などを検討します。

5 府内各地域の個性あふれる文化の発見・創造

京都には、日本文化の粋ともいえる芸術・文化が集積した京都市域以外にも、日本海に面した府北部から奈良県域につながる府南部まで、日本の原風景とでもいえる四季折々の自然や里山があり、それぞれの地域には、豊かな自然環境と厚い歴史に育まれた固有の文化が息づいています。そのような個性あふれる多様な地域文化を広く紹介し、全国からの参加者とともに、より豊かなものへとつなげる祭典を目指します。



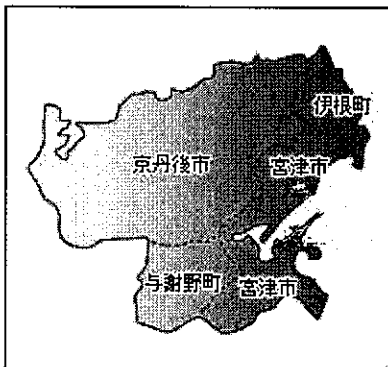
日本列島のほぼ中央に位置する京都府は、北は日本海と福井県、南は大阪府、奈良県、東は三重県、滋賀県、西は兵庫県と接しています。

南北に細長い形の京都府は、そのほぼ中央に位置する丹波山地を境にして、気候が日本海型と内陸型に分かれます。丹後・中丹地域の海岸線は、変化に富むリアス式海岸で、豊富な景勝地や天然の良港に恵まれています。

中丹地域から南丹・北桑地域は、大部分が山地で、丹波山地を源に桂川水系、由良川水系に別れ、その流域には、亀岡、福知山盆地のほか小盆地が点在します。

京都・乙訓、南山城地域は、桂川、宇治川、木津川の三川合流を要に、山城盆地が広がっています。

丹後地域



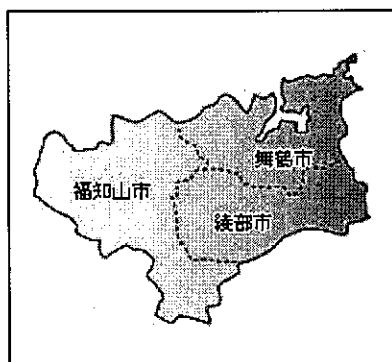
丹後地域には日本三景の一つ「天橋立」のほか、鳴き砂で有名な「琴引浜」、重要伝統的建造物群に指定されている「伊根の舟屋」など、風光明媚な名所や古刹のほか、「丹後王国」やちりめんの里にふさわしく「羽衣伝説」など数多くの伝説や民話が各地に残っており、歴史ロマンに満ちた地域です。

また、先人の知恵・暮らしの中から育まれてきた生活文化や特産品が、豊かな自然の中で息づいています。丹後の歴史、自然・環境を活かした各種事業を広域的に展開していきます。

事業名	内容
シルクファッションフェスティバル	奈良時代に聖武天皇に献上されたことに由来し、我が国有数の絹織物産地である丹後から、従来の概念にとらわれず、新しいスタイルによる「シルク」の魅力を全国に伝えていきます。

丹後文化フェスティバル	日本三景の一つである「天橋立」や美しい海岸線をはじめとする丹後の自然景観を舞台に、作品の展示や伝統芸能などを演出し、全国からの参加者との文化交流を図ります。
全国民話サミット	「羽衣伝説」など数多くの伝説や民話が各地に残っており、歴史ロマンに満ちあふれる丹後において、全国各地に古くから伝わる民話や伝説に親しめるような各種イベントを検討します。

中丹地域



中丹地域には、旧日本海軍ゆかりの赤れんが建造物（舞鶴）、約800年の伝統を持つ黒谷和紙（綾部）、足利尊氏誕生の地とされる安国寺（綾部）、大江の鬼伝説（福知山）など、多くの歴史文化遺産があります。さらに、「福知山ドッコイセ祭り」をはじめ地域の特性あふれる各種祭りやイベントが盛んな地域でもあります。

このような中丹地域の自然・文化・歴史などの地域特性を十分に活かした各種事業を広域的に展開していきます。

事業名	内容
赤れんがをテーマにした総合フェスティバル	舞鶴の赤れんが倉庫群などを舞台に、アートフェスタ、食の祭典、ジャズライブなど多彩な催しを展開します。
「里山」をテーマにした造形展	自然と人の調和した里山の歴史文化を正しく理解し、継承していくとともに、新しい里山文化の創造に向けて、全国から里山をテーマにした作品を募集し、造形展などを開催します。
全国「鬼」フェスティバル	大江山は「酒吞童子」をはじめとする鬼伝説が伝わるロマンの里であり、その遺跡が多数残されています。「世界鬼学会」とも連携し、「鬼」をテーマにした様々なイベントを展開します。

南丹地域

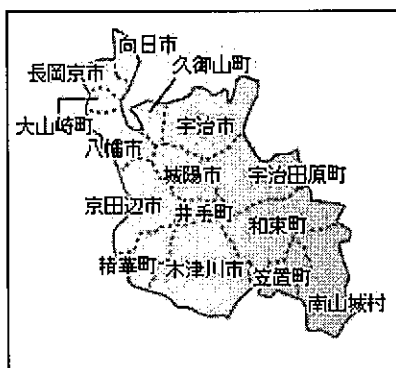


南丹地域は、桂川や由良川をはじめ、旧街道には多くの人や物資・文化が行き交い、都に近い地の利を活かしながら独自の文化を形成してきました。また、各地域では、人形浄瑠璃などの伝統芸能や祭り、丹波ブランドに代表される食文化など、多彩な文化が大切に育まれてきました。さらに、画家の円山応挙や石門心学の石田梅岩、陶芸家の野々村仁清など、多くの歴史上の偉人も輩出してきました。

このような南丹地域の自然・文化・歴史などの地域特性を十分に活かした各種事業を広域的に展開していきます。

事業名	内容
南丹民俗芸能フェスティバル	地域のつながりの中で、郷土色豊かな民俗芸能や祭などに代表される伝統文化が受け継がれてきた南丹地域の歴史や文化を、各地域の文化施設等とも連携しながら全国に紹介します。
丹波食と彩りの祭典	古くから京の食卓へ美味を届ける食の宝庫として知られている丹波から、豊かな自然と土壌で育まれた季節感あふれる旬の味が満載の祭典を実施します。

山城地域



山城地域は、日本の文化のルーツを形成した京都と奈良を結ぶ歴史文化軸上に位置しており、古代には、平城京後に造営された都「恭仁宮」や「長岡京」が置かれた歴史を持ちます。

また、「平等院」をはじめ、「長岡京蹟」「石清水八幡宮」「一休寺」「萬福寺」「浄瑠璃寺」など数多くの歴史的文化遺産が存在し、とりわけ宇治茶は我が国を代表するブランドとなっています。さらに、関西文化学術研究都市は文化・学術・研究の交流発信拠点として目覚ましい発展を遂げております。

このような山城地域の自然・文化・歴史などの地域特性を十分に活かした各種事業を広域的に展開していきます。

事業名	内容
茶文化フェスティバル	日本緑茶発祥の地を全国に発信する機会として、「ふるさとお茶パーティ」をはじめとするイベントの開催のほか、お茶を活かした交流など、茶文化のまちにふさわしい事業を展開します。
全国剪画フェスティバル	剪画は黒い和紙を刃先で切り出して描く絵画であり、日本の伝統的な技法と素材を現代に活かし、新しい芸術の分野を確立したアートです。その魅力を全国に発信する催しを検討します。
「細川ガラシャ」の祭典	16世紀末、勝竜寺城の城主・細川忠興のもとに明智光秀の娘が嫁いだ歴史にちなんだ「ガラシャ祭り」をはじめ、府内各地の関係者や全国の明智光秀ファンとの交流を深めます。
石清水八幡宮と松花堂昭乗展	江戸時代初期に活躍した文人僧であり、寛永の三筆の一人に称せられている松花堂昭乗にちなみ、書の作品を募集し、優秀作品を展示するとともに、多彩な催しを展開します。
おやじたちのコンサート	フォークソング発祥の地と言われる京都から、団塊の世代を中心とした「おやじたちのコンサート」を開催し、あらゆる世代が楽しめる祭典を目指します。
宇治田楽まつり	平安期の宇治の芸能である「宇治田楽」を中心とした躍動感あふれる踊りとパフォーマンスを展開するとともに、全国に伝承されている田楽が一堂に会する祭典を行います。
恭仁京ロマンの祭典	天平12年（西暦740年）聖武天皇が平城京から山背国の地に都を遷した「恭仁京」にちなみ、古代ロマンに思いを馳せ、楽しい想像を巡らせる多彩な催しを検討します。
ストーン文化フェスティバル	巨石信仰によって知られ、大磨崖仏や後醍醐天皇の行在所跡など史蹟名勝地として名高い笠置から、石など自然を素材にした文化芸術をテーマとした催しを検討します。

6 全国から多彩な分野の参加者が集い、垣根を越えて発表・交流 （※は継続事業）

分野別フェスティバルについては、これまで継続的に取り組まれてきた成果も踏まえ、全国からの参加者と府民がともに発表・交流を図りながら、より質の高い表現を目指し、次代への継承・発展につながる取組を展開していきます。

伝統文化のまちづくり・全国交流プロジェクト

京都は我が国が誇る伝統文化に大きな影響を与えた地であるとともに、府内各地には太鼓や人形浄瑠璃をはじめ郷土色あふれる地域の伝統芸能が多数あります。全国の伝統文化の関係者が一堂に集い、交流・共演を行います。

事業名	内容
全国吟詠剣詩舞道祭※	全国の吟詠剣詩舞愛好者が一堂に集い、勇壮華麗な合吟や吟詠・剣詩舞を披露し、交流を深めるとともに、次代を担う青少年が吟詠、剣舞、詩舞に親しめる場を設けます。
民謡・民舞の祭典※	全国の民謡・民舞愛好者が集い、全国各地で歌い踊り継がれてきた民謡・民舞を披露し、交流の輪を広げます。
民俗芸能の祭典※	和太鼓、人形浄瑠璃など我が国に伝わる民俗芸能の関係者が一堂に集い、競演し、交流の輪を広げるとともに、六斎念仏をはじめ京都の郷土芸能を全国に紹介します。
邦楽の祭典	全国の邦楽愛好者が流派を越えて京都に一堂に集い、伝統音楽と現代に創造された音楽を奏で、交流を深め、日本人のもつ「雅」の心を継承していく祭典とします。
日本舞踊の祭典	全国の日本舞踊愛好者が集い、流派を越えて競演し、古典物や創作作品など優美で華麗な舞台を繰り広げ、交流を深めます。
能狂言フェスティバル	全国各地から能楽愛好者が一堂に集い、謡曲、仕舞、狂言、囃子など日ごろの研さんの成果を披露し交流の輪を広げるとともに、次代を担う子どもたちに継承していく祭典とします。

生活文化のまちづくり・全国交流プロジェクト

私たちの日々の生活に欠くことができない生活文化の意義とその多様性を再認識し、全国からの参加者や子どもたちが体感できる取組を展開します。

事業名	内 容
生活文化総合フェスティバル※	生活文化、衣食住、国民娯楽等の日常生活に密着した幅広い分野に係る展示・実演を通して、生活文化のすばらしさを再認識し、心豊かなライフスタイルを模索する祭典とします。
小倉百人一首かるた競技全国大会	全国の百人一首の愛好者が集い、日本古来の室内競技である小倉百人一首かるたの都道府県対抗戦を通じて、競技かるたの普及交流を図ります。

文芸のまちづくり・全国交流プロジェクト

昔から数多くの文学や和歌に登場するなど、歴史的文化遺産ともいえる風光明媚な自然を背景に、数多くの文芸作品を輩出してきた京都を舞台に、全国から作品を公募し、創作活動の素晴らしさをともに共感できるような祭典を目指します。

事業名	内 容
文芸祭※	短歌、俳句、川柳などの各部門について、創作活動に親しむ人々の作品を全国から公募し、優れた作品を展示・表彰することにより、新たな創造と感動の契機とします。

音楽のまちづくり・全国交流プロジェクト

邦楽など伝統音楽が盛んな地であるとともに、芸術系大学などでは、若者たちが、学び、競い、励まし合って、その才能を輝かせるまち・京都において、全国からの愛好者と交流・共演し、音楽のすばらしさをともに実感できる祭典を目指します。

事業名	内 容
合唱の祭典※	全国の合唱愛好者が集い、美しいコーラスの競演を行い、観客と一体となった舞台を構成します。合唱する楽しさ、生きる喜びを実感し、交流の輪を広げます。
少年少女合唱祭	全国の少年少女合唱団が集い、若々しい歌声を響かせ、合唱する楽しさを実感し、全国の仲間と交流を深めます。
吹奏楽の祭典※	全国で活躍する愛好家やアマチュア吹奏楽団が一堂に集い、華麗で魅力あふれる多彩な演奏を通じて、吹奏楽の楽しさ、美しさを表現し、全国の愛好者との交流の輪を広げます。

オーケストラの祭典 ※	全国のアマチュアオーケストラのメンバーが一堂に集い、合同演奏などを通じ交流の輪を広げるとともに、オーケストラのすばらしさを広く伝えていきます。
マーチングバンド・ バトントワリング	全国の小・中・高校のマーチングバンド部、バトントワリング部などの団体が一堂に集い、華麗で躍動感あふれる演奏・演技を通じて、交流を図ります。
室内楽の祭典 (ハープ)	府内外からの出演団体による演奏のほか、京都ゆかりのハープ奏者による特別演奏やハープの体験コーナーなど、ハープに親しみ、ステージと観客が一体となった祭典を目指します。

舞踊のまちづくり・全国交流プロジェクト

クラシックバレエからモダンダンス、斬新なコンテンポラリーダンスなど、個性豊かな創作舞踊が盛んに生み出されているまち・京都において、全国から様々なジャンルの洋舞関係者が一堂に会し、新たな息吹きを感じ取れるような祭典とします。

事業名	内容
洋舞フェスティバル	全国の洋舞愛好者が集い、クラシックバレエやダンス等の優雅で華麗な演技を披露し、交流を深めます。

演劇のまちづくり・全国交流プロジェクト

演劇を専門に学べる芸術大学や創造的な展開を試みる小劇場の存在など、若くエネルギーで創造性あふれる演劇活動の盛んな京都を舞台に、全国からの参加者と交流し、演劇を通じた文化活動の素晴らしさを伝えていきます。

事業名	内容
演劇祭※	全国のアマチュアの演劇団体が集い、楽しく創造性あふれる演劇の競演を行うとともに、交流の輪を広げます。

美術のまちづくり・全国交流プロジェクト

社寺や庭園など京都の歴史空間は、伝統文化の蓄積とも相まって美術表現やものづくりに大きな影響を与えてきました。そのような京都を舞台に全国から作品を公募し、創作活動の素晴らしさをともに共感できるような祭典を目指します。

事業名	内容
美術展※	日本画、洋画、写真、工芸、書などの各部門にわたって、創作活動に親しむ人々の作品を全国から公募し、優れた作品を展示・表彰することにより、新たな創造と感動の契機とします。

7 誰もが主人公の「企画提案・参加型公募事業」

京都は昔から職人のまちとも言われます。技を磨き、洗練し、職人から職人へとその技が伝えられてきました。また、高い理想と信念を持ちながら独自のスタイルや作風を確立している芸術家の存在と併せ、創造活動に携わる一人ひとりの力が日本の文化を支え、高めてきました。

国民文化祭では、個人単位で活動されている方々による発表の機会にも留意し、出演者としても気軽に参加いただけるよう、様々な工夫をこらしていくとともに、「京都」や「日本」をテーマにした企画提案型の事業アイデアを広く全国から募集します。

8 総合フェスティバル～開会式・フィナーレ

最後を飾るフィナーレにおいて、国民文化祭での交流を通じて育まれた相互の絆と、京都開催で生み出された新文化創造の気運を次代に引き継ぐため、「未来・創造～子どもたちへ（仮題）」をテーマに、若者などの自主企画によるステージパフォーマンスを展開し、次回開催県に大会旗を引き継ぎます。

3 協賛事業

(1) 基本方針

- ① 国民文化祭の趣旨に賛同し、その目的に沿った自治体、文化団体及び企業等が行う文化事業について、文化庁が協賛事業として承認します。
- ② 実施に当たっては、全国の自治体、文化団体、マスコミ、企業などに幅広く呼びかけて、多彩な事業が展開できるよう努めます。
- ③ 特に、京都府内においては、府民総参加で取り組む国民文化祭とするために、より積極的に実施されるよう努めます。

(2) 実施期間

平成23年（西暦2011年）4月1日（金）～11月30日（水）〔8ヶ月間〕

(3) 事業例

- ① 美術展、講演会、シンポジウム、コンサート、フェスティバル、その他事業
- ② 国民文化祭に協賛して、全国の都道府県、市町村、文化団体、企業等が行う文化的事業

IV 広 報 計 画

1 基本方針

- (1) 国民文化祭の本府開催が府内外に広く周知されるように、文化庁、市町村及び文化団体との連携を密にして、積極的な広報宣伝活動を実施します。
- (2) 広報活動を効果的に行うため、準備から開催までの段階ごとに広報テーマ、広報計画を策定するなど、様々な機会を通じてきめ細かな広報活動を計画的に展開します。
- (3) 広報活動も文化活動の一つととらえ、広報媒体に応じて、効果的かつ個性ある広報活動を展開します。
- (4) 開催市町村における積極的な広報活動を支援します。
- (5) 府民や文化団体が積極的に広報できるような方法や支援を検討します。

2 年次別広報方針

平成20年度	国民文化祭の名称、テーマ、会期、趣旨など「基本構想」の周知を図るとともに、国民文化祭への理解と関心を高めるため、啓発事業を実施します。
平成21年度	国民文化祭の事業の内容などを掲載した「実施計画大綱」の周知を図るとともに、開催市町村と連携して開催気運の醸成を図ります。
平成22年度	「事業別実施計画」や「募集要項」の周知を図り、国内外から参加者を募集します。また、国民文化祭の雰囲気や楽しさを特に府民に実感できるように、プレ国民文化祭を開催します。
平成23年度	全国からの出演者、観客を迎えるに当たり、事業内容や会場、交通手段等の周知はもとより、観光、物産案内等を積極的に展開します。

3 具体的な実施方法

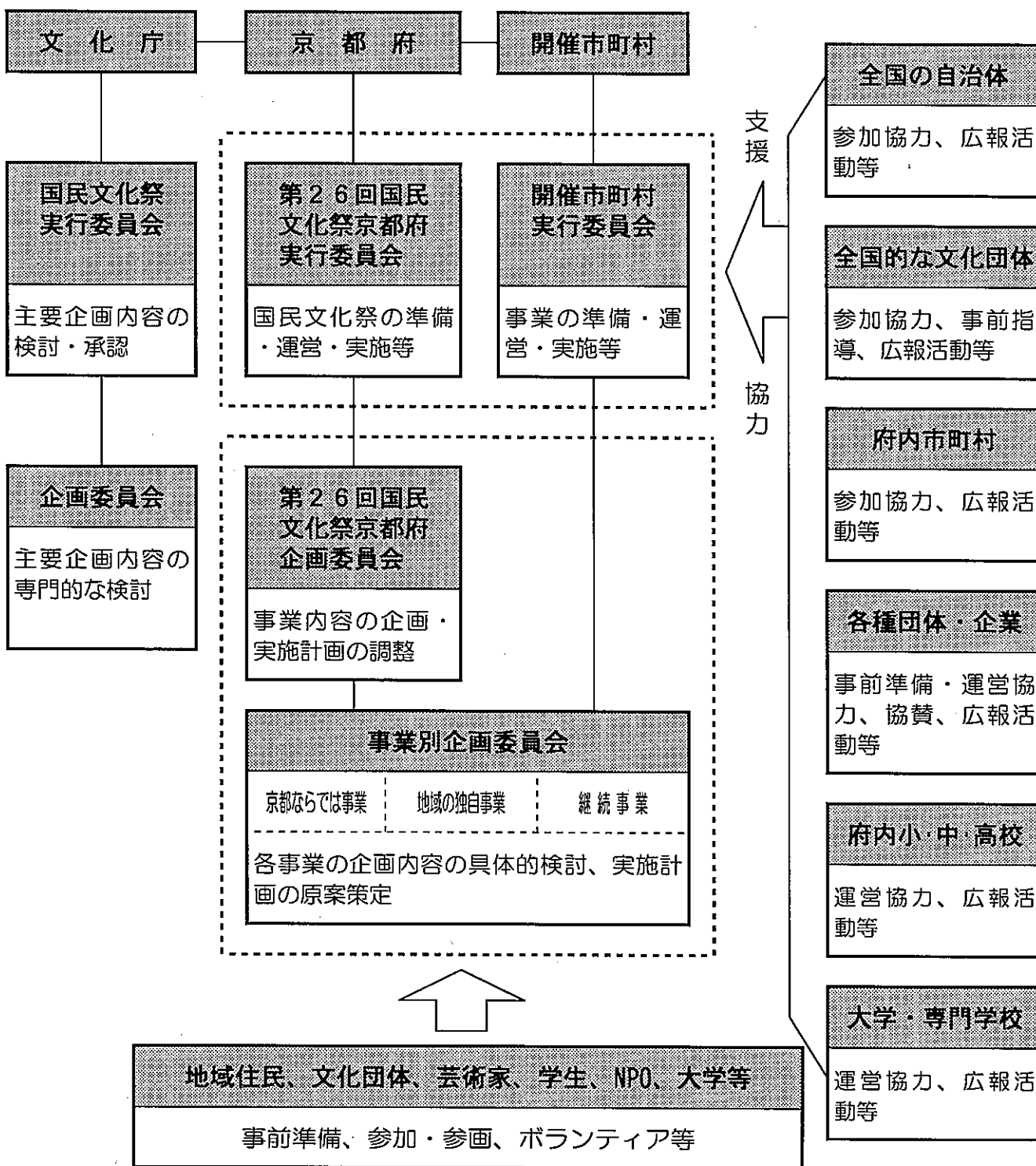
- (1) 府、市町村の広報媒体や文化団体機関誌を活用します。
- (2) 啓発用パンフレット、リーフレット、ポスター等を作成し、配布します。
- (3) ホームページを開設するなど、インターネットを活用します。
- (4) 懸垂幕、広告塔、広告板の設置や記念グッズを作成し、効果的に活用します。
- (5) 各種刊行物、封筒等へのマスコットキャラクターを掲載します。
- (6) 報道機関への情報提供をきめ細かく行い、新聞、雑誌、放送媒体を活用します。
- (7) 府内の文化団体等が実施する各種イベントの開催案内、プログラムに国民文化祭PRロゴ等の掲載を働きかけます。
- (8) キャラバン隊を結成し、府内はもとより全国的なキャンペーンなどにより、近隣府県、国民文化祭開催県への表敬訪問などにより、広報PR活動を実施します。
- (9) 観光キャンペーンや府が関係する各種イベントと連携した広報活動を行います。

V 運営計画

1 運営主体

第26回国民文化祭京都府実行委員会

2 運営体制図



3 運営にあたって

事業の実施にあたっては、府内市町村や文化団体はもとより、準備段階から、NPO、大学、企業等との連携を重視し、分野、地域、年齢、性別、国籍などを問わず、様々な人々が参加できる運営プロセスを目指します。

4 開催計画

年 度	計 画
平成20年度	<ul style="list-style-type: none">・国民文化祭京都府実行委員会、企画委員会、専門委員会等の設置・実施計画大綱（各事業の開催日、開催会場等の決定）（案）の策定・マスコットキャラクターの選定
平成21年度	<ul style="list-style-type: none">・市町村実行委員会の設置・事業別実施計画（事業内容の決定）（案）の策定・出演団体の検討
平成22年度	<ul style="list-style-type: none">・開催要綱、募集要項の作成・配布・プレ国民文化祭の開催・全国広報キャンペーンの実施・各都道府県に出演団体の推薦依頼（一部出演団体の内定）
平成23年度	<ul style="list-style-type: none">・出演団体の決定・協賛事業の実施・「第26回国民文化祭・京都2011」の開催・実施報告書、公式記録の作成

第26回国民文化祭開催準備委員会委員名簿

委員33名（会長◎、副会長○、顧問□、起草委員長▲、起草委員△）

氏 名	役 職 等
浅井敬壹	京都府合唱連盟理事長
麻生純	京都府副知事
安倍秀風	京都府吟剣詩舞道総連盟理事長
◎荒巻禎一	財団法人京都文化財団理事長
有馬頼底	京都仏教会理事長
池坊由紀	華道家元池坊次期家元
市田ひろみ	服飾評論家
井上富三子	社団法人ガールスカウト日本連盟京都府支部支部長（平成19年5月21日～）
井上八千代	京舞井上流家元
□梅原猛	哲学者
△加柴和成	財団法人京都府中丹文化事業団事務局長
柏瀬武	日本放送協会京都放送局長
片倉もとこ	国際日本文化研究センター所長
△川崎純性	文化力創造懇話会委員
岸本久美子	京都府高等学校芸術文化連盟副会長
金剛育子	能楽金剛流宗家夫人
佐藤啓子	前社団法人ガールスカウト日本連盟京都府支部支部長（～平成19年3月31日）
齊藤修	株式会社京都新聞社取締役常務執行役員
佐藤研一郎	財団法人ローム ミュージック ファンデーション理事長
汐見明男	京都府町村会会長
四方八洲男	京都府市長会会長（平成19年5月21日～）
千宗室	茶道裏千家家元
瀧浪貞子	京都府文化財保護審議会委員
立石義雄	京都府商工会議所連合会会長（平成19年6月1日～）
田中恆清	京都府神社庁長
△土居好江	特定非営利活動法人遊悠舎京すずめ理事長
△畑正高	財団法人お香の会常務理事
八田英二	財団法人大学コンソーシアム京都理事長
久村哲	前京都府市長会会長（～平成19年4月25日）
星川茂一	京都市副市長
○村井康彦	財団法人京都市芸術文化協会理事長
村田純一	財団法人京都文化交流コンベンションビューロー理事長
山下隆子	社団法人京都青年会議所特別顧問
▲鷺田清一	大阪大学総長
渡部隆夫	社団法人京都経済同友会 代表幹事

（敬称略、五十音順）

第26回国民文化祭基本構想検討の経過

平成17年 9月30日	平成23年の京都開催が内定
平成18年10月23日	第1回開催準備委員会
平成18年11月14日	第1回起草委員会
平成18年12月19日	第2回起草委員会
平成19年 1月24日	第3回起草委員会
平成19年 3月19日	第2回開催準備委員会
平成19年 5月17日~8月22日	市町村ヒアリング
平成19年 7月26日	第4回起草委員会
平成19年 9月22日	第5回起草委員会
平成19年11月19日	第3回開催準備委員会
平成20年 2月 6日	第6回起草委員会
平成20年 3月25日	第4回開催準備委員会